

西団山文化の墓葬に関する研究

三宅俊彦

はじめに

西団山文化は、中国東北地区の吉林省吉林市を中心に栄えた青銅器時代の文化である。一九八七・八八・八九年の東北亜細亜古文化研究所の第二次・第三次・第四次中国東北地区遺跡調査旅行に参加した際、私はこの西団山文化の遺跡を見学する機会を得た。見学したのは、西団山・東団山・騷達溝・長蛇山・猴石山・狼頭山・小白山の諸遺跡であった。西団山文化は、中原を中心としたいわゆる中国の青銅器時代と平行し、西周から秦・漢の時代まで続いたと考えられる文化であるが、吉林という中原より遠く離れた地理的条件により、赤峰地区、遼東半島地区等を通しての間接的な中原文化の影響を受けながらも、独自の文化を形成している。この論文では、特に西団山文化の墓葬について論じてみたい。それは、この文化のひとつの特徴ともいえる墓葬の型式、すなわち石棺墓について考えることにより、この文化をよりはっきりととらえることが出来ると考えたからである。

一、研究史

西団山文化の遺跡が考古学者によって調査されるのは一九三〇年代からである。一九三二年に故李文信氏が吉林龍潭山の遺

跡報告を行ない⁽¹⁾、続いて日本の故三上次男氏が一九三九年に吉林团山子の遺跡の調査報告を発表してこの地区に石器時代の遺跡があることを確認した⁽²⁾。

西团山の石棺墓群の調査は、解放後の一九四八年に吉林師範大学（元東北大学、現東北師範大学）の教師と生徒が第一次発掘を行なったことに始まる。一九四九年七月から八月にかけて、吉林師範大学では再び第二次発掘を行なった⁽³⁾。一九五〇年に東北考古発掘団により第三次発掘がなされ、紅焼土が発見されたことから、西团山には墓地の他にも別の遺構があることが判明した⁽⁴⁾。これは王亜州氏によれば住居址である⁽⁵⁾。

この調査の後、東北考古発掘団の名義で、佟柱臣氏により発表された報告で、西团山の墓葬遺跡に代表される文化を「西团山文化」と呼ぼうという意見が正式に提出された。

西团山遺跡では、現在まで合計して石棺墓四八基、灰坑一基が発掘されている。

二、文化内容

分布範囲　西团山文化の分布範囲は現在まで、明確に定められる説は出ていない。佟柱臣・薛虹・董学増氏などが検討を加えているが、私は基本的には董学増氏の説と一致する。

東側の図們江流域の小営子を代表とする文化は石棺墓の発見があるものの、西团山文化の単人葬とは異なり多人葬である。また出土遺物の中に骨角器の占める割合が高いことなどから西团山文化とは異なる⁽⁶⁾。また、黒龍江省牡丹江市の東康・三靈屯の遺跡には鬲・鼎などの三足器を出さない点においてやはり西团山文化と異なる⁽⁷⁾。このことから西团山文化の東限は、威虎嶺を越えないと考えられる。さらに北の黒龍江省哈爾濱などの松花江流域は松嫩平原となり第二松花江の丘陵地帯を中心としている西团山文化とは異なった文化の様相を呈している。黒龍江省肇源県白金宝遺跡の土器は、無紋のものも多いが、縄紋・動

出土遺物・遺構より代表的な遺跡を年代順に並べると次のようになる。西団山↓星星哨↓猴石山・長蛇山↓土城子。まず、西団山遺跡は青銅器を出土せず、また土器も粗製で種類も少なく、石棺墓も副棺のある古いタイプのものがあることから、西団山文化の中においてかなり早い時期である。星星哨遺跡は、土器は西団山遺跡とほとんど同様であるが、青銅短剣・青銅矛の出土のあることから西団山遺跡よりも新しいと考えられる。猴石山と長蛇山遺跡はほぼ同時期の遺跡であるが、西団山遺跡や星星哨遺跡の土器と較べると、壺の口縁部の口径が小さくなり、立ち上がりも直立に近いこと、また石棺墓も板石から石塊が主たる構造物となることなどから、西団山遺跡や星星哨遺跡より後の時代であることが解る。土城子遺跡はさらに新しく、それまでの遺跡が丘陵地にあったのに対し、土城子遺跡は沖積平原の台地にあり、石棺墓の種類も石塊で積みあげたものだけになる点は西団山文化でも後期の遺跡であることが解る。

出土遺物より年代を見ると、星星哨遺跡より出土している青銅短剣は、いわゆる遼寧式銅剣であり、秋山進午氏のいうところのⅠ式に属する。秋山氏は、このⅠ式銅剣は烏金塘墓より銅戈とともに出土しており、胡に対し援が長目で先端が三角状に角張ったこの銅戈を、中原より出土している銅戈と合わせ、年代をほぼ春秋初期、前八世紀をさかのぼらないと考えている⁽¹²⁾。これにより、Ⅰ式銅剣を出土する星星哨遺跡も春秋以降と考えられる。ここで、青銅器を出さない西団山遺跡を西周まで年代を引き上げることが出来るか、という問題がある。西団山遺跡と星星哨遺跡の土器等には大きな変化はないことから、ほぼ同時期の遺跡であることは明らかであり、この点において言えば西団山遺跡を西周まで引き上げるのは疑問が残る。しかし、ここでは放射性炭素年代測定の結果が西周を示している点も考え合わせ、ひとまず西団山遺跡から星星哨遺跡は西周末から春秋の初めあたり、猴石山・長蛇山遺跡は春秋から戦国、土城子遺跡は戦国晩期から秦・漢の時期までと考えたい。ここではそれぞれ前期・中期・後期と呼ぶ。

出土遺物 出土遺物は、土器・石器・青銅器がある。

イ、土器 土器は基本的に砂質で、灰黒色あるいは紅褐色のものが主である。器種は、前・中期にはそれほど多くの種類は

ないが、後期に入ると漢文化の影響などを受け種類も多く器形も複雑になって来る。前・中期の器種は、壺・罐・鉢・碗・鼎・鬲・豆・単孔の甑・紡錘車などである。後期になるとそれに加え折肩大甕・単耳杯・楕円形の盆・多孔の甑などが現われる。⁽¹⁸⁾ 器形は時期により若干変化しており、壺などは前期は比較的広い口径で頸が短めになっており、外傾ぎみに立ち上がっている。中期になると口径が小さくなり、さらに後期には長頸となり垂直に立ち上がる形へと変化する。また、共通の特徴として胴部中央に双耳がつくものがある。これは縦・横の二種類があり、橋状幅広で厚みがある。紋様は無紋が基本であるが、あるものは耳部に陰刻方格紋があり、また紡錘車に放射状の連点紋、あるいは割紋をほどこしたものもある。⁽¹⁴⁾

ロ、石器 石器には、磨製・打製の他に少数ながら細石器がある。細石器の出土は西団山遺跡など前期の遺跡からのみである。磨製石器の種類には、斧・斨・鑿・鏟・耜・刀・鎌・鏃・矛・劍・環状器・有孔石球・有孔石錘・紡錘車・砥石などがある。その中で、長身の棒状石斧と、大型で長さとの幅の比が四・一以上の半月形の双孔石刀が特徴的である。この石刀は石棺墓中より発見されるため、副葬品として作られたもので、実用ではないとの考え方もある。⁽¹⁵⁾ 打製のものには石錘・鋤などがある。

ハ、青銅器 青銅器は、武器・装飾品・生産工具などがある。武器には、劍・矛・鏃などがある。劍は星星哨遺跡から一本⁽¹⁶⁾と楊屯遺跡から残片が見つかっているだけであるが、⁽¹⁷⁾ 星星哨遺跡の銅劍は秋山進午氏のⅠ式⁽¹⁸⁾、林湮氏のA型Ⅰ式である。⁽¹⁹⁾ さらに楊屯遺跡出土の銅劍残片は、秋山進午氏のⅡ式、林湮氏のB型の残片であると考えられる。これは、星星哨遺跡出土のものより新しい時代のものであり、新旧関係を明確に示している。装飾品は扣・泡飾・連珠形飾・勾形飾・銅をかぶせた木製の櫛、腕輪などがある。⁽²⁰⁾ 生産工具には斧・刀子などがある。長蛇山遺跡出土の銅斧は、刃部が扇状に広がり、身部上方に斜方格紋を施しており、⁽²¹⁾ これは秋山進午氏のⅠ式銅斧に相当する。⁽²²⁾ また後期の楊屯大海猛遺跡出土の銅斧は刃部が扇状に広がる点は長蛇山遺跡の銅斧と同様であるが、身部上方には一条の突線帯をめぐらすのみとなっており、⁽²³⁾ これはⅡ式にあたる。秋山進午氏によれば、Ⅰ式の発展型がⅡ式であり、西団山文化においても同様のことが言えることになる。銅刀子の形式には二

青銅器

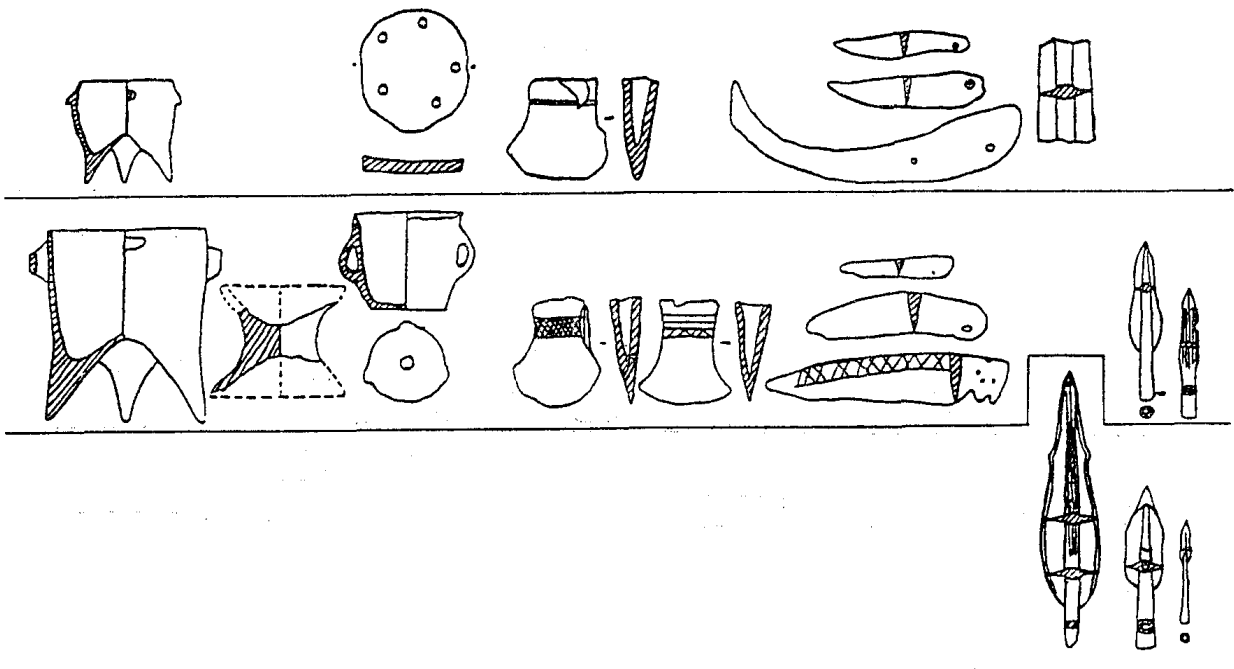


図2— a 西団山文化の土器・青銅器

種類あり、一種類は柄部の下縁に歯状の突起のあるもの、もう一種類は柄部に円形孔のあるものである。両者とも内反りのものと刃部の先端が上方へ反り返るものとに分かれ円形孔のある刀子は、土城子遺跡出土のもののように極端に反り返ったものが存在する。⁽²⁴⁾ 青銅器は全体的に見て前期は武器・装飾品が多く、中・後期には、生産工具が比較的多くなり、装飾品の種類も増える。(図2)

三、主な遺跡に見る石棺墓

西団山文化の石棺墓はこれまで多数発見され、調査されて来たが、ここではその中でも代表的な遺跡の石棺墓について概略を紹介し、その副葬品について見て行きたい。

イ、西団山遺跡 西団山は吉林市の南西二・五キロ、松花江の西岸にあり、西団山より西へ丘陵が連らなっている。⁽²⁵⁾

石棺墓は南西側の斜面にあり、地表より約一メートルほどの地下に、多くは花崗岩の石塊を積み上げて築かれている。石塊の形状は大小があり一定ではないが、全て平らな面を内側にしており、内面は平らになっている。棺底には板石を用い、棺の側壁と同様棺頭・棺尾も石によって築かれている。その後、巨大な板石あるいは石塊を用いて

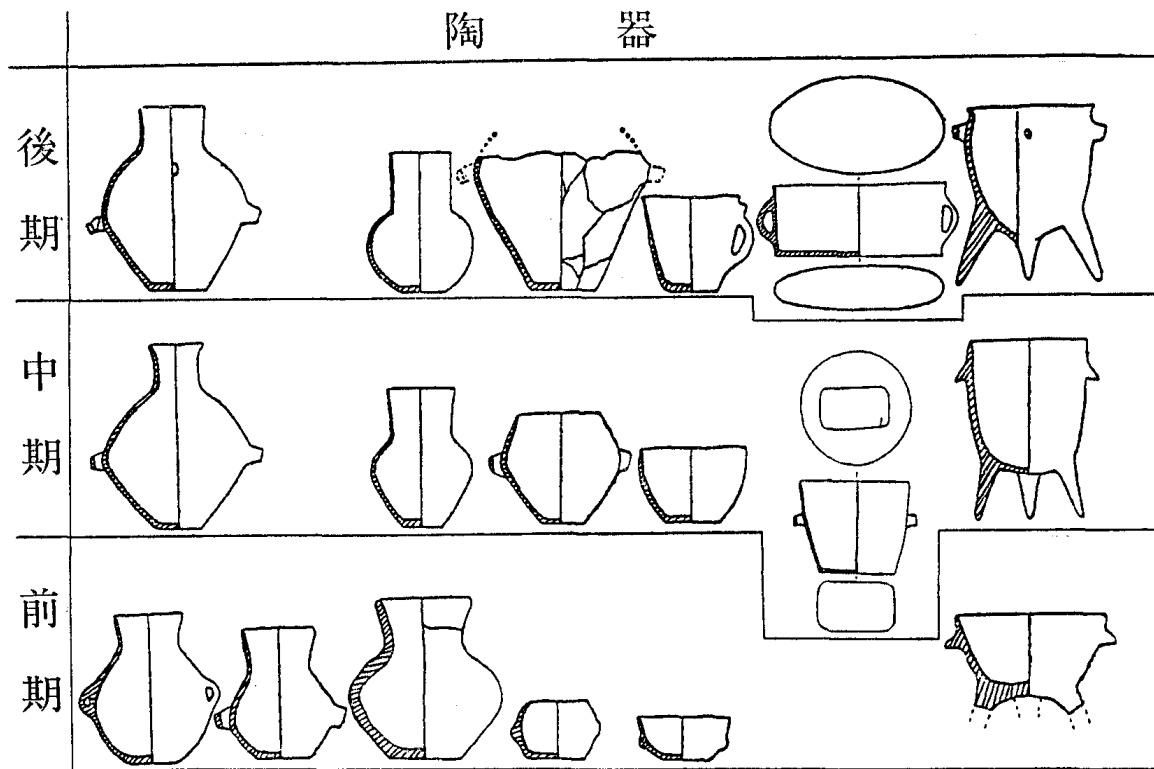


図 2—b 西団山文化の土器

棺蓋にしている。棺の内側は現在の木棺の形状とよく似ており、頭部が広く尾部が狭くなっている。木棺と違う点は棺尾の外に石塊を用いて一室を設け、その中に副葬品を並べているものが存在することである。この中からは罐・壺などが発見されている⁽²⁶⁾。

副葬品は、土器・石器が主であり、青銅器の出土はない。石器の多くは変質砂岩、頁岩などから成っており、磨製が主で石斧・石鏃・石刀・石鏃・砥石などがある。石刀はこの地方独特のもので、長さが三〇センチ以上あり、長さとの幅の比が四・一以上の有孔半月形石刀である。土器では壺・罐・碗・紡錘車などがあり、またわずかながら三足器の出土もある。他に野猪の歯の装飾品が二件、白石管玉の装飾品も五一件出土している⁽²⁷⁾。これらの副葬品のうち、野猪の歯の装飾品や白石管玉などは頭部や胸のまわりから出土し、石刀・石斧・石鏃・紡錘車などの生産工具は腰部から、土器類は足下および副棺のあるものは副棺の中より出土している。

以上の副葬品の各棺からの出土状況を東北考古発掘団の報告書の表と、故三上次男氏の「満鮮原始墳墓の研究」の西団山遺跡の出土遺物の表をもとに新たに表を作製してみた(表1)。この表を見ると、石刀と紡錘車を出土する墓には石鏃の出土はない(一区十二号墓では石刀と石鏃と一緒に出土しているが、これは特別な例と言える)。騷達

墓号	種類	石 器					陶 器					装 飾 品		獸 骨
		砍折器	石斧	石鉢	石刀	石鏃	紡錘車	壺	罐	鉢	碗	三器足	石管玉	野猪歯飾
東北考古発掘団 I		1			1		1		1	1		1	1	○
東北考古発掘団 II									1					
東北考古発掘団 III														
東北考古発掘団 IV		1			1		4	2		2		11		○
東北考古発掘団 V			1	1	1			1						
東北考古発掘団 VI					2		2		1	1			1	
東北考古発掘団 VII						3		1	1					○
東北考古発掘団 VIII					1		1	1			1	1		
東北考古発掘団 IX					1		2		1	1				○
東北考古発掘団 X		1			1		2	1		1				○
東北考古発掘団 XI				1										
東北考古発掘団 XII											1	7		○
東北考古発掘団					1		2	1						
東北考古発掘団					1		1	1			2			○
東北考古発掘団					1			1				7		
東北考古発掘団							1	1				1		
東北考古発掘団					1		1		1					○
東北考古発掘団								1				25		○
東北考古発掘団			1			12		1	1	2				
東北師範大学蔵品1区12号			1		1	19		1		1				
東北師範大学蔵品1区10号			1		1	1	90	2						○

表1 西団山遺跡の副葬品

溝遺跡でも同様の状況であり、男性の墓からは斧・鏃・鏃・鏃が発見され、女性の墓からは石刀・紡錘車などが発見されることから、西団山遺跡でも石斧・石鏃の出土する墓は男性、石刀・紡錘車の出土する墓は女性の墓であると考えられる。III号墓からは何の副葬品も発見されていないが、この墓は小型であり、内部に小児の頭骨と歯の残片のあったことから、小児用の石棺墓であったと考えられる。⁽²⁸⁾ 石棺墓の内
外から猪の骨が出土している例が二一例中一〇例

見つかっている。同様の例は、赤峰地区の石棺墓からも報告されているが、赤峰地区は主に犬の骨であったのに対し、西团山遺跡では猪の骨が多い。埋葬儀礼に関係するものと考えられ、赤峰地区がその生活の基盤を狩猟に置いており、家畜としての猪が重要視が重要な役割を示していたのに対し、西团山遺跡（吉林地区）では農耕に生活の基盤を移しており、その一例として副葬品にされていたことを示すものと思われる。しかし、赤峰地区の石棺墓の埋葬儀礼と類似した点もあり、その一例として副葬品に三足器を使用しない点⁽³⁰⁾があげられる。西团山遺跡では二一基の石棺墓中わずかに二基しか三足器を出土していない。これは赤峰地区でも同様であり、埋葬儀礼の共通の特徴といえる。

ロ、星星哨遺跡 星星哨遺跡は永吉県大崗子公社と岔路河公社の中間にある星星哨ダムの東岸に位置する。

石棺墓群は東西に走る丘陵の南斜面に位置し、高さはもとの地面より約四〇メートルである。分布は四つの区域に分けられ、三次にわたる発掘により、A区三五基、B区六基、C区二三基、D区二二基が発見された⁽³¹⁾。石棺墓の構造は、板石を壁面として四壁とするものと石塊を積み上げて壁とするものに大別でき、副棺はなかった。石塊でつくったものがC区の一基を除き、すべてA区とD区より発見されている⁽³²⁾。板石の石棺墓は前期に多く見られ、石塊の石棺墓は中期前半に多く見られることから、B区・C区に較べA区・D区は比較的新しい時期の墓区であると考えられる。

副葬品は石器・土器の他青銅の武器類が見られる。石器の多くは変質砂岩と頁岩で磨製であり、器種には石斧・石刀・石鏃・石鏝・紡錘車・砥石などがある。石刀は大型の双孔半月形石刀の外、直背直刃の長方形に近いもの、柄部を磨出している曲刃のものなどが出土している。土器は素面の砂の混入した粗製の土器で、器種には壺・罐・鉢・鉢・紡錘車などがある⁽³³⁾。青銅器は劍が一件、矛が二件、泡飾が六件、腕輪が二件出土している⁽³⁴⁾。青銅器を出土する石棺墓はA区のAM十一号墓とAM十九号墓、D区のDM十三号墓とDM十六号墓であり、石棺墓の分類同様A・D区が新しく、B・C区が古い墓区であることを裏付けている。AM十九号墓より出土した青銅短劍は秋山進午氏の言うところのI式であり、最も古いタイプの遼寧式銅劍にあたる⁽³⁵⁾。AM十一号墓・DM十三号墓より出土した銅矛も刃部は遼寧式銅劍のI式と類似しており、これも矛としては古いタイプ

種類 墓号	石 器					陶 器						青銅器		獸骨	その他
	石斧	石鉢	石刀	砥石	石鑿	壺	罐	鉢	碗	鼎	紡錘 車	劍	矛	猪骨	
AM 1		1	1		1	1	1							○	
AM11	1		1			1		1					1		翡翠墜 2
AM18															破壊
AM19	2		1	1		1	1					1			男
AM20	2		1				2								男
AM21		1	1				1								男
AM22	1		1	1		2									男
AM23	1					1			1					○	男
AM24							1			1	1				女
AM25								1	1						女
AM26	1		1			1			1						男
AM27						1	1								女
AM28	2		2			1		1							男
AM39						1			1		1				女
AM30	1	1	1			2	1								男
AM31															男
AM32															幼児
AM33															幼児
AM34	1					1		1							磨棒
AM35			1			1			1						

A区

種類 墓号	石 器				陶 器					獸骨	その他
	石斧	石鉢	石刀	紡錘 車	壺	罐	碗	紡錘 車	猪骨		
CM 6	1		2		1	1					
CM 7	1		1			1					
CM15											破壊
CM16											破壊
CM17											破壊
CM18	2		1		1		1				男
CM19				1	1			1			女
CM20	3		1		1						男
CM21	1	1	1		1	1					男
CM22	1		1		1		1				男
CM23				1	1		1	1	○		女

C区

種類 墓号	陶器		獸骨
	壺	罐	猪骨
BM 2	1	1	○

B区

表 2 - a 星星哨遺跡の副葬品

種類 墓号	石 器					陶 器					青銅器			獸骨	そ の 他
	石斧	石鉢	石刀	紡錘 車	石鑿	壺	罐	鉢	碗	紡錘 車	矛	泡鉤	腕環	猪骨	
DM 1															破壊
DM 2															破壊
DM 3						1	1								女
DM 4															幼児
DM 5	1					1									男
DM 6	1				1	1			1						男
DM 7															
DM 8	1		1				1		1						男
DM 9	1		1				1		1						男
DM 10						1	1								女
DM 11	2					2									男
DM 12						1		1							女
DM 13	1		1			1		1	1		1				男
DM 14							1		1	2				○	女
DM 15				1											女
DM 16				1		1	1	1		1		6	2		包銅木櫛1、木環1、女
DM 17	1		1			1			1					○	毛布巾、男
DM 18	1					1		1	1					○	男
DM 19	1	1				1			1					○	男
DM 20						1		1							女
DM 21						1		1						○	女
DM 22						1		1							女

表 2-1b

D区

であることが推測される。

これらの副葬品を、出土した墓号と個数が正確に解るものだけをまとめ、各地域ごとに表にしてみた(表2)。これによれば、幼児の石棺墓を除けば多くは副葬品があり、その数の多少の度合も低いことから、身分の分化はこの時期にはあまり顕著でなかったことが解る。猪骨の出土も西団山遺跡ほど割合が高くないが、見られることから埋葬儀礼は西団山遺跡とあまり違わなかったと考えられる。埋葬者の性別のわかる石棺墓の副葬品を見ると、男性の墓には石斧が多く(石刀も出土している)、女性の墓からは石刀の他、紡錘車の出土が見られ、性的分業が行なわれていたことがうかがわれる。また西団山遺跡では出土していた石鏃が出土していないことも生産活動の変化として注目される。土器の副葬品

は、壺と罐のどちらかと、鉢と碗のどちらかがそれぞれセットになって出土する。三足器の副葬も一件しかなく、西団山遺跡同様三足器の副葬の習慣はなかったことが解る。青銅器は劍・矛などの武器は男性の墓より、裝飾品は女性の墓より出土している。

ハ、猴石山遺跡 猴石山遺跡は吉林市郊外の大屯公社孤家子大隊の北二キロあまり、海拔二六〇メートルの猴石山にある。

一九七五年の調査によって発掘された石棺墓は三基で、副葬品は十七件であった。墓壁は石塊でつくられ、棺墓・棺尾及び蓋石は板石が用いられて、頭部を山頂へ向けていた。M一号墓は人骨の遺存はなかったが、副葬品に青銅刀子が発見されている。この刀子は麻布の袋に入れられ、石棺中央の西側より発見された⁽³⁶⁾。形状は刃部が内反し、柄部に齒状の突起も見られるので、刃部には中原あるいはオルドスの影響が見られるが、柄部の齒状突起は東北地方あるいは中原東方に見られる特徴と言

種類 墓石	石器	陶器	青銅器	裝飾品	その他
	石斧	壺	刀子	青銅管玉	
M 1			1		刀子は麻布の袋に入っていた
M 2				10	翠墜 2、小坏 1
M 3	1	1			小坏 1

表 3 猴石山遺跡の副葬品

え、西団山文化以外の出土例として、河北省唐山市甯神廟出土の刀子⁽³⁷⁾、内蒙古昭烏達盟寧城縣南山根出土の刀子などが知られる。M二号墓の型式は、棺底の板石上に長さ一・七四、幅〇・三七、厚さ〇・〇六メートルの黄泥の土台をつくるという特殊なものであった。副葬品は白石管玉十件、翡翠の墜二件、小坏一件で仰身直肢葬、骨格と裝飾品の多い副葬品から、女性の墓であると考えられる。M三号墓はM二号墓が黄泥土台であったのに対し、棺底の板石上に黄泥で枠（黄泥土框）をつくっている。副葬品は石斧と壺が一件づつであった。

以上三基の石棺墓より出土した副葬品から解ることは、副葬品の数が全体として少なくなっていることである。またこれまで一般に見られていた石斧、石刀、壺（罐）、鉢（碗）のセットがくずれ、逆に裝飾品や青銅器などが多く入れられる様になったと考えられる（表 3）。

ニ、長蛇山遺跡 長蛇山遺跡は猴石山遺跡の東約二キロの丘陵上にあり、北に連なる丘陵と南に開ける平原の間にある海拔二三〇メートルの丘陵上に七段に及ぶ梯形台地を形成している。台地の一段

種類 墓号	石器		青銅 器	その他
	石斧	石刀	矛	
57M1				遺物なし
57M2	1	1		
63M1			1	瑪瑙管 1
63M2				遺物なし

表4 長蛇山遺跡の副葬品

の広さは約二〇〜二二メートルで、総数三〇〜四〇の住居址が分布している。

墓葬はこれまで四基しか発見されていない。そのうち二基は石棺墓、二基は土坑墓である。石棺墓は五七M一号墓と五七M二号墓で二基とも石塊を積み上げて壁としている。五七M一号墓には副葬品はなく、五七M二号墓からは石斧と石刀が各一件づつ出土している。残る二基は土坑墓であるが、六三M一号墓からは青銅矛が副葬品として出土している⁽³⁹⁾。この矛は尖葉形をしており、星星哨遺跡出土の矛よりも新しい時期のものと考えられる(表4)。

猴石山遺跡も長蛇山遺跡も西団山文化中期に属する遺跡であるが、二キロ程しか離れていないにもかかわらず、猴石山遺跡の墓葬は黄泥土台や黄泥土框へと発展するのに対し、長蛇山遺跡の墓葬はむしろ簡略化し、土坑墓へと向かうのは注目値する。

ホ、土城子遺跡 土城子遺跡は松花江右岸の沖積平原にあり、南一・五キロのところを松花江が東から西へ流れ、哈達湾から湾曲して北へ流れている。東は虎頭山、北甸子、大礮子、荒山咀子、龍潭山等の丘陵が続いている⁽⁴⁰⁾。

石棺墓はほとんど長軸を東西に向けており、頭を東へ向けて埋葬されていたと考えられる。型式は、石塊を積み上げて壁面としているタイプのもので、副棺は見られない。その中で二四号墓は泥框が棺底につくられており⁽⁴¹⁾、猴石山遺跡の黄泥土框と同様のものと思われる。

副葬品の種類はそれほど多くなく、石器が主であり、中でも石斧の占める割合が高い。その他、石器では石鏃、石鏃、石鏃、土器では壺、罐、碗、土錘、小坏、青銅器では刀子、連珠状飾物などがある。また白石管玉も出土している⁽⁴²⁾。土城子遺跡の副葬品の特徴は、石刀を出土しないことである。これまで見て来た多くの遺跡が石斧と石刀をセットとして副葬していたのに対し、土城子遺跡では石斧は多く出土するが、石刀はまったく出土していない。これにより、その他の遺跡が丘陵

種類 墓石	石 器				陶 器				青銅器		裝飾品	獸骨	そ の 他
	石斧	石鉢	石鏃	石鏝	壺	罐	碗	土錘	刀子	連珠狀飾物	白玉	猪骨	
2	2								1			○	銅刀に有孔骨製の柄の残片
4												○	小坏2
7	2		1									○	
8	2						1					○	
10					1				1		1	○	陶網墜も多数有り?
12											25	○	小坏2、瑪瑙珠1
14	1											○	小坏2
15												○	小坏2
17	2	1										○	
18	2											○	
20	1	1		1							4	○	
22	1	1						32			20	○	翡翠墜1
23												○	瑪瑙珠1
24					1	1				14		○	

表5 土城子遺跡の副葬品

の斜面に存在したのに対し、土城子遺跡が河に囲まれた沖積平野に位置する点と合わせ、土城子遺跡の人々は農耕よりも漁労に力を入れていたと考えることも可能である。その裏付けとして土錘が多いことが挙げられる。吉林省博物館の「吉林江北土城子古文化遺址及石棺墓」(『考古学報』一九五七年一期)の本文によれば、「棺の四周には土錘が散乱あるいは積み上げられており、最も多く出土したのは第一〇・二三号墓である。」となっている。しかし、同報告書の石棺墓出土遺物統計表では土錘は二二号より三三件出土したのみとなっており、本文と食い違いを見せている。従って数字・墓号等は甚だ信用がおけないが、土錘が多く遺存していたことは間違いないと考えられる。⁽⁴⁸⁾ 副葬品の特徴として、土器の少ないことも挙げられる。ここでもやはり今までと違い、壺(罐)・鉢(碗)のセットがくずれ、小坏を副葬する例が増えている。埋葬儀礼に関する特徴として、ほとんどの石棺墓より猪骨が発見されており、西団山遺跡など前期の遺跡から見られる風習が後期の土城子遺跡にまで確実に受け継がれている。

青銅器の副葬品の中で、二号墓出土の刀子は大変特色のある形をしており、刃部が先細りになり大きく外反して行く。柄部には一孔があり、骨柄の残片が共出している。⁽⁴⁴⁾この刀子の刃部は、オルドス方面からの影響が認められるが、柄部の型式はオルドス方面には見られないものであり、この点において吉林地区の特色的な青銅刀子であると言える。一〇号墓からも刀子が出土しているが、吉林省博物館の論文の図版貳六に見られる刀子がそれだとすると、二号墓の刀子と同形ということになる。一〇号墓出土の刀子の方がより完全に形体を止めており、柄部には二つの孔があり、柄が刃と平行につけられていたことがよりはっきり解る。外反する先細りの刃部もより明確に見られる。また二四号墓出土の連珠状飾物もオルドス方面との関連を裏付ける上で注目される。

以上、西団山文化の主な遺跡に見られる石棺墓の主にその副葬品について見て来た。さらに石棺墓の型式自体について考えて見たい。

四、石棺墓の分類

西団山文化の石棺墓は、これまで見て来たように様々の種類がある。ここではその中のいくつかの特徴に注目し、分類を試みたい。しかし、その分類の対象となる石棺墓は現在まで入手した報告書に正確に報告されているいくつかの石棺墓に限られるため、さらに多くの種類に分類できる可能性がある。

西団山文化の石棺墓の分類はこれまで劉景文氏が「西団山文化墓葬類型及發展序列」(『博物館研究』一九八三年一期)の中で行なったものが発表されている。氏は石棺墓を板石でつくったもの(A型)、石塊で側面を棺頭と棺尾を板石でつくったもの(B型)、全て石塊でつくったもの(C型)に大きく分け、その中でそれぞれ細かな分類を行なっている。

石棺墓の墓室は、一般に長さが一・五〇〜二・六〇メートル、幅が〇・三〇〜一・〇〇メートル、深さが〇・二〇〜〇・九

遺跡名	A							B						
	I	I'	II	II'	III	IV	IV'	I	II	II'	III	IV	V	VI
西団山遺跡	1	8	8			4								
騷達溝遺跡		1	2	10						1				
星星哨遺跡								62	7		5			
小西山遺跡								1	4	1				
万宝山遺跡								1						
猴石山遺跡	1		25		1	13	5	1	69		6	25	1	1
長蛇山遺跡									1					
土城子遺跡			25			1								

表6 各遺跡における型式の分布

○メートルほどで、板石あるいは石塊を内面が平らになるように積み、蓋石に整形していかない板石を幾枚か用いている。⁽⁴⁵⁾積石塚のような形態のものではなく、墳丘の有無は不明であるが、その痕跡が認められないことから墳丘はなかったと考えられる。石棺墓の中には長さ一・二メートルほどの小型のものもあるが、これは幼児のものであり、副葬品も少ない。私はこれらの石棺墓の棺底の状態に注目し、まずA・Bの二型式に分類し、さらにその中で幾つかの型式に細分化してみたい。

A型…棺底に板石を敷く型の石棺墓。まず土坑を掘った後、棺底に幾枚かの板石を敷き、平らに整えた後に壁面を築く。この型の石棺墓は四つのタイプに細分化され、さらに副棺のつく場合がある。

I式…A型の石棺墓で、壁面を板石によって築くタイプ。長軸に平行する形で両側に幾枚かの板石で側壁をつくり、棺頭と棺尾に一枚づつ板石の壁をつくる。

I'式…A型I式の石棺墓と同じであるが、棺尾に一枚の板石によって隔壁を設け、副棺をつくる。副棺の最後尾は板石によって隔てられないことが多い。また、棺尾脇に板石によって別に副棺を設ける場合もある。副棺内には石器、土器などの副葬品を副葬する。

II式…A型の石棺墓で、壁面を石塊によって築くが、棺頭と棺尾は板石によって壁をつくるタイプ。長軸方向の壁面は不整形の石塊によって何段かに積み

上げられる。その際内壁は平らになる面が向けられる。しかし、棺頭と棺尾には板石が用いられ、一枚の板石で壁をつくっている。

Ⅱ式…Ⅱ式と同様に石塊で側壁を、板石によって棺頭と棺尾を築くが、副棺を設けるタイプ。

Ⅲ式…A型の石棺墓で四壁を全て石塊で築くタイプ。Ⅰ・Ⅱ式とも棺頭・棺尾は板石によってつくられていたが、この式は棺頭・棺尾とも幾つかの石塊を積み上げてつくられている。ちなみにこのⅢ式の石棺墓では、副棺のある例は報告されていない。

Ⅳ式…A型の石棺墓でⅡ式と同様に石塊で側壁をつくり、棺頭と棺尾を板石によってつくっているが、さらに棺底の板石の上に埋葬者を囲むように長方形に黄泥によって土框を設ける。

Ⅳ式…Ⅳ式の石棺墓でさらに棺尾に副棺のつくタイプ。副棺は石塊によって壁面がつくられている。

B型…棺の底に板石を敷かず、そのまま地山を平らにして棺底にする。石棺墓によっては花崗岩の地山をそのまま棺底にしているものもある。この型は六つに分けることが出来、基本的に副棺はつかないと考えられるが、例外的にⅡ式に二例見られる。

Ⅰ式…B型の石棺墓で板石によって壁面をつくるタイプ。長軸方向の側面には幾枚かの板石を用いて壁をつくり、棺頭・棺尾は一枚ずつの板石を用いて壁とする。

Ⅱ式…B型の石棺墓で長軸方向の側壁は石塊を用いて幾段かに積み上げて壁面とするが、棺頭と棺尾には一枚ずつ板石を用いて壁面とするタイプ。

Ⅱ式…B型Ⅱ式と構造は同じであるが、棺尾に板石によって四壁を囲んだ副棺をもつ。副棺内には石器・土器などの副葬品が入る。

Ⅲ式…B型の石棺墓で四壁全てを石塊で築くタイプ。長軸方向の壁面はもちろん、棺頭と棺尾も幾つかの石塊を用いて壁と

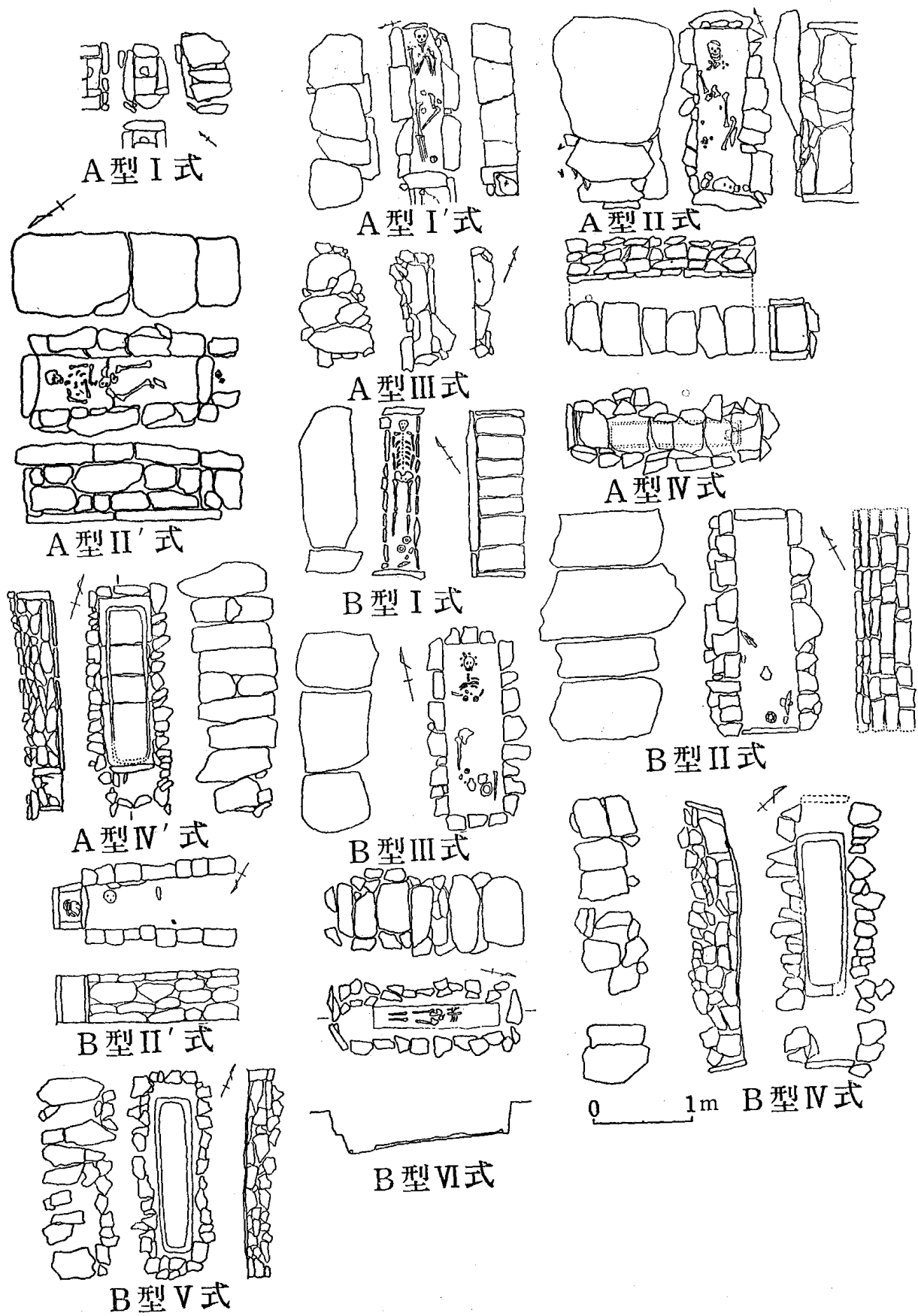


図3 石棺墓の型式

している。

IV式…底石のないB型の墓葬で、棺底に長方形の黄泥土框が直接地山に設けられ、長軸方向の側壁は石塊、棺頭と棺尾は板石によって築かれているタイプ。

V式…IV式と同様に棺底の地山に直接黄泥土框がつくられているが、四壁はIV式と異なり石塊のみで全て築かれている。

VI式…B型の石棺墓で、四壁全てが石塊でつくられているが、棺底に埋葬者をのせる形で長方形の黄泥土台が設けられている。

以上、これまで報告されている西団山文化の石棺墓を棺底の形状に着目して分類を行なってみた(図3)。これを各遺跡ごとの表にあらわしたものが表6である。入手出来た各遺跡の報告書をもとに、明らかに型式分類可能な図を有しているものだけを選び表にした。また、劉景文氏の論文で分類されている型式を参考に、私の分類に概当する項へ劉氏の統計表の数字をあてはめさせていただいた。遺跡名は表の上段より順に年代順に並べてあり、前期の遺跡は西団山遺跡、騷達溝遺跡、星星哨遺跡、中期の遺跡は小西山遺跡、万宝山遺跡、猴石山遺跡、長蛇山遺跡、後期の遺跡は土城子遺跡である。この表を見ると、おむね前期はA型、前期の終わりから中期にかけてはB型が主な墓葬の型式であることが解る。後期になると、再びA型が主となっているが、後期は石棺墓の他に土坑墓、甕棺墓などの墓葬が出現し、石棺墓自体の型式もくずれつつあると考えられる。この外、A型I式・B型I式など板石で四壁をつくる型式の石棺墓は前期に集中しており、中・後期にはそれ以外の石塊を用いる型式が大部分となる点は注目すべきである。これは、A型IV式・B型IV・V・VI式などの黄泥によって土框や土台を設けるタイプが石塊を用いる型式にのみ見られる点とあわせ、石棺墓が変化して行く過程を示していると考えられる。なお、これらの黄泥土框や黄泥土台は木棺の痕跡であるとする意見もあり、この型式の石棺墓は石槨木棺墓の可能性もあわせて考える必要がある。

五、騷達溝山頂大棺について

これまで、西団山文化の石棺墓について、その主な遺跡の検討と型式の分類を行なって来た。しかし西団山文化には、今まで見て来た石棺墓とは全く趣を異にする石棺墓、すなわち騷達溝山頂大棺が発見されている。

騷達溝山頂大棺は一九四九年に王亜州氏が騷達溝の石棺墓群を調査した際、併せて調査された⁽⁴⁶⁾。この石棺墓は吉林市の西、騷達溝村の北側にある平頂山に位置する。平頂山は平頂東山と平頂西山に分れ、山頂大棺は平頂東山の山頂にあり、海拔は三〇七メートルである。石棺の構造は、まず山頂上に南北方向に長い長方形の深さ一・五メートルほどの岩坑を掘り、次に南北両壁に整形された板石を立てる。そして棺底にも整形された板石を敷き、さらに東西両壁をやはり整形された板石によって築く。これらは全て花崗岩で、ひとつの壁は一枚の板石によって出来ている。この後に北・東・西壁上に花崗岩の石塊を一層並べる。これは西団山文化の外の石棺墓と同様に、平面を内側に向ける様に築かれる。最後に巨大な楕円形の花崗岩の大石を棺上に置き蓋とする。この石棺墓は墓自体大きなもので、長軸約二・三メートル、短軸約一・一メートル、深さ約一・一メートルであり、蓋石は南北最大幅二・七メートル、東西最大幅二・三三メートル、厚さは最大〇・四五メートルであった⁽⁴⁷⁾。(図4)。

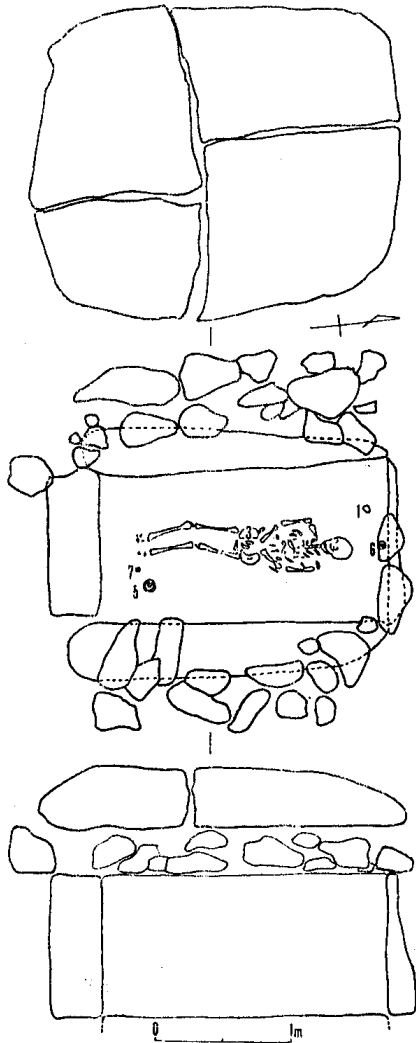


図4 騷達溝山頂大棺

副葬品もひとつの石棺墓内から出土した数は西団山文化内で一番多く、七一件である。内容は青銅器では銅斧一件、刀子二件、鳴鏞一件、銅扣一六件、土器では曲頸壺一件、直頸壺一件、紡錘車二件、石

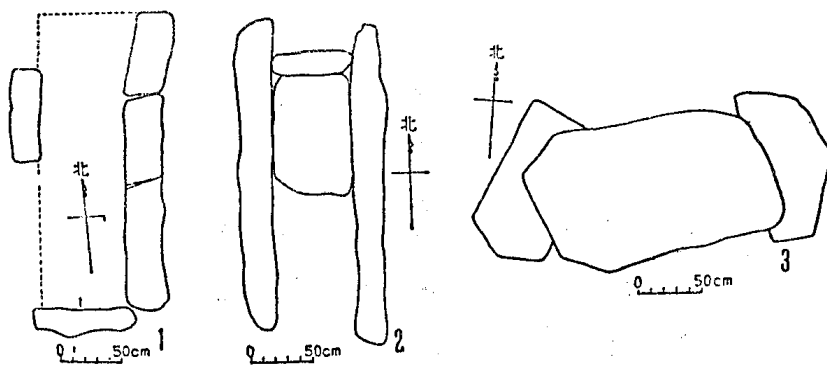


図5 松花江上流地区の石棺墓
 1. 靖宇県陽郷道水屯
 2. 靖宇県榆樹川郷隣牛崗
 3. 撫松県新安郷撫生屯

器・玉器類では半月形単孔石刀一件、垂飾一九件、瑪瑙珠飾一件、白玉管飾六件、白石管飾二二件というものであった。⁽⁴⁸⁾
 この石棺墓は、場所が丘陵の斜面ではなく山頂にあること、規模も大きく壁面が全一枚の板石でつくられていること、副葬品が多く、青銅器の量も豊富であることなどから、当時のこの地域においてはかなりの権力があつた者の墓であつたと考えられる。

そして、この騷達溝山頂大棺を墓葬の型式の面から見ると、山頂に立地し、四壁を一枚の大型の板石でつくり、蓋石にも巨石を一枚だけ用いている点において、丘陵の中腹に数枚の板石または石塊によって四壁をつくり、数枚の板石によって蓋石としている他の西団山文化の石棺墓とは明確な相違が見られる。これら山頂大棺に見られるような特徴を有している墓葬は、松花江をさらに上流へ行った遼寧省靖宇・撫松県の石棺墓に見ることが出来る。⁽⁴⁹⁾ この地の墓葬は丘陵の山頂にあり、大型の板石によって四壁を築き、一枚の板石を蓋石としている(図5)。

故三上次男氏はこれら靖宇・撫松の石棺墓を支石墓に近いものと推測し、箱形石棺墓が支石墓に推移する過渡的状态を示すものとの考えを提示している。支石墓が箱形石棺墓より発展して来たとするその論拠には、支石墓の構造を用いている。三宅俊成氏の調査した復県化銅鉞と通化县大廟の両支石墓は、復県化銅鉞の場合、支石を立てるため地中に五〇センチほどの深さに埋められ、その石室内部は地表より約五〇センチの深さに砂が満たされており、その下部中央に一体の人骨が発見され、同じ平面の片隅には支石の壁面に接して土器三個と青色軟玉製多頭石斧一個が発見されたという。また通化县大廟の支石墓でも石室中央の表土下数十センチの所から人骨の発見があつたということである。これらは、石室内部の地表が支石墓の作られている地表よ

り低い位置にあったことを示しており、支石を立てるために必要な方法であったと同時に自ら地下に箱形石棺類似の構造を作ったことは、支石墓の起源が箱形石棺墓にあることを示す有力な証左であると論じている。また、岫巖県姑嫂石第二号支石墓と清源県南雜木村支石墓の二例は、石室内部の地表に板石が敷かれており、これも箱形石棺を想起させるもの⁽⁵⁰⁾としていられる。いまもし、この論に従って支石墓が石棺墓より発展した墓葬であり、その過渡的な墓葬として靖宇・撫松の石棺墓をあげるこゝとが出来るとするならば、それらと非常に近い形式を西団山文化内の騷達溝山頂大棺の中に見いだすことが出来、石棺墓から支石墓へと変化する最も早い形式の変化の徴候は、松花江上流の靖宇・撫松県のものからさらに北上し、松花江中流域の吉林騷達溝山頂大棺まで遡れると考えられよう。

おわりに

この小論では、中国東北地区の吉林市周辺の青銅器文化の西団山文化について、主にその墓葬、いわゆる石棺墓について見て来た。石棺墓とは、石棺に直接被葬者を埋葬し、木棺などを設けない型式の墓とする観点より西団山文化の墓葬を考えた。しかし、土城子遺跡の二四号墓などの黄泥土框を木棺の痕跡とする意見もあり、⁽⁵¹⁾全ての墓葬を石棺墓であるとは言い切れない部分がある。黄泥土框が木棺の痕跡であるとする確たる証拠がないため、ここでは可能性を示唆するに止める。今後の研究の進展を待ちたい。

その西団山文化の石棺墓であるが、棺底の形状に着目して大きく二つの型に分類した。すなわち棺底に板石を敷くA型と棺底に板石を敷かないB型である。これをさらに四壁を全て板石でつくるもの、長軸方向の壁を石塊、棺頭と棺尾を板石でつくるもの、全て石塊でつくるもの、黄泥により土框や土台を棺底につくるもの、また副棺の有無などにより細分した。これにより、前期は主にA型、前期の終わりから中期にはB型が主な墓葬の型式となり、中期の半ばより後期にはかなり多様な墓葬の

種類が現われることが明らかとなった。

また、西団山文化には騷達溝山頂大棺と呼ばれる、どの種類の墓葬にも属さない墓が存在する。これは他の墓葬とは異なり、丘陵の斜面ではなく山頂に立地すること、副葬品が多く、青銅器の副葬品も豊富なこと、石棺の壁をそれぞれ一枚の板石のみでつくり、規模も大型なことから、当時の首長クラスの墓であると考えられる。そしてこの墓葬を型式の面から見た場合、遼寧省の靖宇・撫松県などに見られる石棺墓に類似し、この種の石棺墓が支石墓へと推移する過渡的状态を示す可能性があることから、支石墓のルーツを松花江上流の靖宇・撫松の石棺墓から、松花江中流の騷達溝山頂大棺まで遡らせて考えられるとした。

西団山文化の研究は、未発掘の遺跡の数も多く、今後ますます充実して来るであろう。同時に石棺墓に関する研究も進むはずであり、これからは西団山文化内の石棺墓の研究だけに止まらず、広く周辺文化の石棺墓、さらには支石墓や積石塚との関連を考えて行く研究が必要になって来るであろう。

付記…この小論は駒沢大学へ卒業論文として提出したものを改訂したものです。卒業論文の指導をいただいた駒澤大学教授・飯島武次先生ならびに多くの助言をいただいた大手前女子大学教授・秋山進午先生、千葉大学教授・加藤晋平先生に厚く御礼を申し上げます。

註

- (1) 李文信「吉林龍潭山遺跡報告(一)」(『滿洲史学』一卷二号 一九三七年)
- (2) 三上次男「滿洲国吉林団山子の遺跡」(『人類学雑誌』五四卷六号 一九三九年)
- (3) 董学増『西団山文化研究』(吉林市博物館 一九八四年)
- (4) 東北考古発掘団「吉林西団山石棺墓発掘報告」(『考古学報』一九六四年一期)

- (5) 吉林大学歴史系文物陳列室「吉林西团山子石棺墓発掘記」(『考古』一九六〇年四期)
- (6) 文教部「延吉小営子遺跡調査報告」(『滿洲国古蹟古物調査報告』第五編 一九四四年)
- (7) 黒龍江省博物館考古部・哈爾濱師範大学歴史系「寧安県東康遺址第二次発掘記」(『黒龍江文物叢刊』一九八三年三期)
- (8) 黒龍江省文物考古工作隊「黒龍江肇源白金宝遺址第一次発掘」(『考古』一九八〇年四期)
- (9) 三上次男『満鮮原始墳墓の研究』(吉川弘文館 一九六一年)
- (10) 董学増「試論吉林地区西团山文化」(『考古学報』一九八三年四期)
- (11) 遼寧鉄嶺地区文物組「遼北地区原始文化遺址調査」(『考古』一九八一年二期)
- (12) 秋山進午「中国東北地方の初期金属文化の様相(上)」(『考古学雑誌』一九六八年 第五三卷四号)
- (13) 註(10)に同じ。
- (14) 註(3)に同じ。
- (15) 飯島武次教授より口頭にて教授。
- (16) 吉林市博物館・永吉県文化館「吉林永吉県星星哨石棺墓第三次発掘」(『考古学集刊』第三集)
- (17) 劉振華「永吉楊屯遺址試掘簡報」(『文物』一九七三年八期)
- (18) 註(12)に同じ。
- (19) 林澧「中国東北系銅劍初論」(『考古学報』一九八〇年二期)
- (20) 註(10)に同じ。
- (21) 註(24)に同じ。
- (22) 秋山進午「中国東北地方の初期金属文化の様相(中)」(『考古学雑誌』一九六九年 第五四卷一号)
- (23) 註(10)に同じ。
- (24) 劉景文「試論西团山文化中的青銅器」(『文物』一九八四年四期)
- (25) 註(4)に同じ。ただし賈蘭坡「吉林西团山古墓之発掘」(『科学通報』一九五〇年 一卷八期)によると海拔二三三・二メートル、
吉沈線より三二・二メートルの高さで、地平より約二〇メートルとなっている。
- (26) 註(4)に同じ。
- (27) 註(4)に同じ。
- (28) 註(5)に同じ。

- (29) 東亜考古学会『赤峰紅山後』(東方考古学叢刊甲種第六冊 一九三八年)
- (30) 註(29)に同じ。
- (31) 註(16)および吉林市文物管理委員会・永吉星星哨水庫管理处「永吉星星哨水庫石棺墓及遺址調査」(『考古』一九七八年三期)
- (32) 註(16)に同じ。
- (33) 註(31)に同じ。
- (34) 註(16)の本文による。しかし腕輪は図に二件あり、本文の一件とくい違うため、腕輪のみ図によった。
- (35) 註(12)に同じ。
- (36) 吉林地区考古短訓班「吉林猴石山遺址発掘簡報」(『考古』一九八〇年二期)
- (37) 安志敏「唐山石棺墓及其相關的遺物」(『考古学報』一九五四年第七冊)
- (38) 李逸友「内蒙古昭烏達盟出土的銅器調査」(『考古』一九五九年六期)
- (39) 註(21)に同じ。
- (40) 吉林省博物館「吉林江北土城子古文化遺址及石棺墓」(『考古学報』一九五七年一期)
- (41) 註(40)に同じ。
- (42) 註(40)に同じ。
- (43) ちなみに本小論の「表5」は統計表の数字を使用している。
- (44) 康家興「吉林江北土城子附近古文化遺址及石棺墓」(『考古通訊』一九五五年創刊号)
- (45) 劉景文「西团山文化墓葬類型及發展序列」(『博物館研究』一九八三年一期)
- (46) 吉林省博物館・吉林大学考古專業「吉林市騷達溝山頂大棺整理報告」(『考古』一九八五年一〇期)
- (47) 註(46)に同じ。
- (48) 註(46)に同じ。
- (49) 註(9)に同じ。
- (50) 註(9)に同じ。
- (51) 註(40)に同じ。

図・表

図1 董学増氏の助言により作成。

図2 (10)より作成。

図3 (4)(16)(36)(40)(45)および、段一平・李蓮・徐光輝「吉林騷達溝石棺墓整理報告」(『考古』一九八五年一〇期)、吉林省文

物工作隊「吉林磐石吉昌小西山石棺墓」(『考古』一九八四年一期)により作成。

図4 (46)より作成。

図5 (9)より作成。

表1 (4)(9)より作成。

表2 (31)により作成。

表3 (36)により作成。

表4 (21)により作成。

表5 (40)(44)により作成。

表6 (21)(45)および、吉林省文物工作隊「吉林磐石吉昌小西山石棺墓」(『考古』一九八四年一期)、許彥文「吉林双陽万宝山石棺墓」

(『黒龍江文物叢刊』一九八四年三期)により作成。